

# NewsLetter



自治医科大学地域医療オープン・ラボ

Vol.185, Jun, 2024

## 一度目の失敗を乗り越えての投稿

### ☆推薦文☆

永山純先生、論文掲載おめでとうございます。この論文には二つの大きな価値があります。一つ目は、当初の論文は完成できませんでしたが、気持ちを一新して新しい論文に取り組んで形にできたことです。当初の論文を完成できなかったことは決して失敗でも恥じるものではなく、むしろそこから学ばいい経験となったはずで。そして二つ目の価値は、ご自身で論文作成、投稿、改訂まで全て対応されたことです。自分の力で論文を完成させたことは、大きな自信となったことでしょう。この経験をもとに今後のさらなるご活躍と指導者として成長されることを願ってやみません。

自治医科大学 地域臨床教育センター長 佐藤 健夫

### 永山 純 (鹿児島県 34期卒業)

鹿児島34期の永山と申します。今回は壊死性筋膜炎のCase reportをアレルギーリウマチ科教授の佐藤 健夫先生のご指導のもと、無事書き上げることができました。自分はCRSTに依頼し、症例報告投稿にいたるまで、1度挫折し、2回目の症例でアクセプトされました。あまり自慢できる体験談ではないですがこの場を借りて報告させていただきます。

自分は鹿児島県の離島診療で義務年限のほとんどを過ごしてきました。総合内科として、呼吸器、血液、内分泌など幅広く診療する傍ら、忙しさにかまけて論文執筆には手が回りませんでした。時々先輩方に論文を書いたらどうかと勧められたことがありましたが、どのように取りかかればいいのかわからないまま義務年限が終わろうとしていました。ただ義務年限が終わる前に、これまでの診療でやってきたことを英文の症例報告にして形にしたいという気持ちがあり、2020年にCRSTに依頼をさせていただきました。はじめは「肺胞出血を契機に診断し得たANCA関連血管炎」の症例で相談させていただきました。そのときに指導してくださったのが佐藤先生でした。しかし、検査項目の欠如が多く、説得力がないこと、そして論文の新規性にインパクトがなく、Discussionがまとまらないなど、執筆中に壁にぶつかり筆が止まってしまいました。佐藤先生はそんな自分に、少しずつでもいいから執筆を進めるように励ましの連絡をくださいましたが、進捗が報告できない後ろめたさで、投稿に至らずに終わってしまいました。挫折してしまった罪悪感もあり、最後まで支えてくださった佐藤先生に謝罪とお礼だけでも伝えたくて、2023年に教室を訪問させていただきました。その時先生から、自分が症例報告をまだ書きたいという気持ちがあるのであればサポートしてくださると提案していただきました。ちょうどそのとき、学会用に作成していた壊死性筋膜炎の症例があったので、相談したところ、偶然にも佐藤先生も以前壊死性筋膜炎の症例報告を執筆したご経験があったことから、快く受け入れてくださり、これが最後のチャンスと思ってもう一度執筆しようと決意しました。まずは松原教授の著書「論文作成のABC うまいケースレポートの作成のコツ」を熟読し基



礎を再学しました。症例報告の構成を理解して作成するのとしなないとでは、書きやすさが全然違います。前回勉強しないで書こうとしていた自分の浅はかさに恥ずかしさを覚えました。佐藤先生の的確なご指導があったおかげで、書き始めて2ヶ月で投稿、minor revisionのみで総期間6ヶ月で、BMC Infectious Diseasesにアクセプトされました。症例報告の内容は、壊死性筋膜炎がLactobacillus属により引き起こされることが稀にあり、弱毒と言われるにもかかわらず広範囲の壊死を伴うというものでした。疾患自体は決して珍しいものではありません。ただ「この菌で壊死性筋膜炎を起こすことある？」という疑問から調べたことが始まりでした。疾患の原因や結果、検査が普通の経過と少し異なり、それが臨床に役立つのであれば症例報告の価値があるのだと学べた一例でした。地域医療に従事しながらも、ふと思い返しただけでも、2〜3例は症例報告できたかものと思える症例があったように感じます。少し踏み出すだけで、自分の臨床経験を世界に発信する機会があったのだと考えれば、もっと早く取り組んでいればよかったと非常に後悔しています。これからはCRSTの素晴らしい活動を、後輩たちにどんどん伝えていきたいと思います。最後になりましたが、依頼当初の相談時から本当に長い期間ご指導いただいた佐藤先生をはじめ、素晴らしい機会を与えてくださったCRSTの先生方に、心から感謝を申し上げます。

(Necrotising fasciitis with extensive necrosis caused by Lactobacillus: a case report Jun Nagayama, Takeo Sato, BMC Infectious Diseases volume 24, Article number: 425 (2024))